家庭における「造形遊び」
―描画材料との触れ合いを主として―

三上 慧[a]

[a] 湘北短期大学非常勤講師

【抄録】

幼稚園や保育園での教育における「造形遊び」に関する研究に比べると、家庭での実践に関する研究は未だ十分な余地があると思われる。本研究は、主に描画材料と触れ合いながら幼児が家庭で行う造形遊びに関する事例研究である。幼児Ｔ（現在３歳５か月）を研究対象として、過去３年間にわたって日常的な造形遊びの変遷過程を観察し、遊びから生まれた多様な制作物を質的に分析した。その結果、発達段階に応じて自発的な遊びの内容･方法に変化が認められた。家庭における「造形遊び」の教育的意義をより深く理解するために、探求的実践を継続する必要がある。

【キーワード】

造形遊び　家庭　描画材料　発達段階

1. はじめに

「造形」という授業を通して保育者養成に携わる機会を頂いてから、子どもの「遊び」について考える機会が多くなったと感じている。これまで筆者は、高校・短大・大学の美術や造形の授業において受講生の主体的・協働的「学び」を深めるためにいかに支援者として足場かけをし得るかについて、日々の授業研究を通して考えてきた。一方で、幼児教育においては、幼児の主体的な学びを促すことを考えると､「学び」よりむしろ「遊び」が大切であることに気づかされることが多々あった。自らの日々の育児を通しても、子どもの遊ぶことの大切な意義について実感しているところである。『保育所保育指針』（平成 29 年告示）の１歳以上３歳未満児の「保育のねらい及び内容」の中で「遊びや生活」というように遊びと生活が並列され示されていることからも窺えるが、幼児と過ごせば自然に思い知らされる通り、子どもは生活そのものが遊びと直結している。それも大人が考える遊びとはまた違う感覚・視点によるものであり、朝に目が覚めた瞬間から、夜に眠りに落ちる瞬間まで、目一杯遊びに満ちているのである。その日その日の体調や気分によって遊びの様子や程度に差はあっても、「遊びたい！」という根底に流れる衝動的な心のありようは変わらないように見受けられる。大人にとって当たり前になっている“日常の些細なこと”や､大人が忘れてしまっている“何かを疑問に思う気持ち”など、子どもと一緒に過ごす中で、はっとさせられ共に改めて

考えずにはいられない状況になることがある。遊びを通して子どもたちから発信される様々な表現の中でも、本稿で着目しているのは、描画材料との触れ合いを主とした幼児による家庭での「造形遊び」である。特に、その家庭でのあり様を、保育者（主に母親・父親）の視点から考察したい。

2. 研究の背景

2017年3月の3法令同時改定(幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領）により、幼稚園も保育園も認定こども園も全て幼児教育の基礎を養う場所という質の保障が言及された。[1] 幼児教育のあり方、その位置づけが問われる時代であるが、一方で家庭での造形遊びに関する実践研究については、さほど進んでいないと思われる。

造形遊びとは、「もの」を介した自発的な表現活動のことである。筆者はこれまで、「彫刻」という立体造形表現の研究を継続し、心中のイメージを頭の中で再構築し、それを見える形で平面のデッサンに起こし、さらにそれを存在する「もの」として立体に起こしていく過程を経て、空間に木彫を凛と存在させる制作に取り組んできた。その専門的見解もあることから、幼児が造形活動において表現する姿に接するとき、それが平面であれ立体であれ､子どもの内側から「表れ」る衝動（時に激しく、時に静かに）が「現れ」[2] となって私たちの目の前に広がることに、人間の本質（根源的な表現欲求）を感じる。そして、こうやって少しずつ（時に大胆に、時に繊細に）自由に自己表現する体験を積み重ねてほしいと願わずにはいられない気持ちになる。各家庭の事情もあるだろうが、このような機会を日々の中で提供し、必要に応じて促し、温かく見守ることは、子どもの心身の成長に大きく関与することにつながると考えている。それは、造形表現というのは、造形体験だけでなく他の全ての感覚（五感）やそれに基づいた体験と関連して発達が促されるものであり、他の表現領域（言語表現、身体表現、音楽表現）とも絡み合って感受性が育つものと考えられるからである。[3]

3. 目的

本研究の目的は、主に描画材料と触れ合いながら幼児Ｔ（現在３歳５か月）が行う家庭での造形遊びを事例として、幼児の造形表現について考究し、「幼児の造形表現を支援する上で大切なことは何か」を明らかにすることである。

4. 方法

幼児Ｔを研究対象として、過去３年間にわたって日常的な造形遊びの変遷過程を観察し、遊びから生まれた多様な制作物（描画材料を中心にしたもの）を質的に分析した。筆者は、Ｔが家の中で最も長く過ごす部屋において、本人がいつでも自発的に造形活動を始められるよう、発達に応じて容易に手が届く場所に造形材料・用具を置き環境を整えた。制作物は、絵･塗り絵などの平面から、折り紙・厚紙などの平面～立体工作、積み木・粘土などの立体まで多岐にわたるが、本稿では描画活動に至るまでの遊びの変化が見て取れるものと実際の絵を中心に分析する。結果としての制作物を重視するわけではなく、Ｔが描くことや造ることの過程に、筆者がその時々で必要と思われる距離感で丁寧に寄り添い観察を試みるよう配慮した。例えば、筆者はＴが絵を描いている最中に何を描いているのか気になっても、Ｔ本人が満足して描き終わるまで待ってから聞くようにしている。すると、Ｔ自身が意識していたのか後付けか

定かではないが、必ず「○○」と答えが返ってきた。その瞬間の両者の瑞々しい感覚を留めておきたく、筆者は絵の端か裏に「○○」とメモしておくことを習慣づけている。日付とＴの発言をメモしていたことによって、数か月～１年以上たってからも、そのメモを見るとその瞬間を思い出し、成長の過程に驚かされる。なお、造形活動支援の計画としては、いわゆる一般的な発達段階に相応しい時期・材料というものに拘らずに、その月齢のＴなりに素材の遊びを楽しむことを予測して、まずは目の前に材料を提供してみることとした。また、いわゆる技法を学ばせることを目的とはしていないため、技術的な指導は極力行わず、自由にやらせることを方針とした。次の「結果と考察」において、描画材料との触れ合いや一連の制作物を振り返り、実際の展開（過程、内容、結果）や、Ｔ自身は何を感じ表現していたのかなどを分析することで、支援者として配慮したことも含めて、家庭における幼児の造形活動の支援のあり方について考察を加えたい。

5. 結果と考察

造形活動の具体的な事例について、月齢順に遊び方の特徴を記録する。同じ素材でもＴの心身の発達とともにＴの素材との関わり方（遊び方）が変化していったため、その展開に着目したい。Ｔの造形活動と表現された制作物の両方の観察から、Ｔの遊びを通した成長・発達とからめて造形表現活動の意義に関わる支援のあり方を振り返る。

初めての描画活動は、１歳０か月である。インクではなく水をペンの中に入れて描けるタイプのもので、乳幼児向けの玩具（頂き物）を使用した。ペンを右手で上から握り（まだ手首を返す力が無いため下から握ることはできない）【図１】、薄いピンク色のシートが描いた跡だけ水で濃いピンク色に変わるのを楽しんでいる。描いた水が乾くと絵が消えてしまうので、紙もインクも消費することと無く、同じ面に繰り返し描けるというメリットがあった。安全面で優れていることや、描いた結果より描く過程を大事にするという意味では、よい商品であると思われる。ただ、筆者としては描いたものが例え偶然の産物であっても、思い出といつかの分析のために残しておきたいとの希望がある。Ｔにも自分で描いたものを振り返って見たりお話をさせたりする体験を促したいため、絵が消えるタイミングをこちらが操作できない（数分で消えてしまう）本商品はあまり使用する機会が無かった。

【図１】水で描けるペンで描く

同時期の１歳０か月、描画に加えて積み木遊びもできる形状のクレヨンを、初めての本格的な造形材料【図２】としてＴに与えた。

【図２】クレヨンと触れ合う（口に入れる）

案の定、描画よりも、まずは口に入れてこの玩具が何者なのかを確かめることに長い時間を費やす日々が続いたが、これで紙に色がつくことに気が付くと、手で柔らかくクレヨンを握り描画を始

めた。太い方（乳幼児でも握りやすい構造）を握って描くようにできている商品であるが、そんなことはお構いなしに細い方をつまむように持ち、その後持ち方をいろいろ試みるもまずはクレヨンを落とさずにつかんでいることが難しいようであった。筆者の予想では、ぎゅっと強い力で握り力任せにクレヨンを動かすことを想像していたが、実際は力が入らないのか、なでるように描き、複数の色の線（比較的短く薄い線）が残った。12 色のうち好きな色を使用するが、平気でよそ見などして描いたりしながらも出来上がった絵【図 3】にはそれ程関心を示さず、その紙をやぶいたり穴を開けたりすることの方に注意が向いていた。スケッチブックの長辺がリングで止められているので、そこにクレヨンを当ててガタガタ描く感触を試している様子も窺えた。なお、T が描画に慣れないうちは、できるだけ大きい紙を用意していろいろなサイズの絵を自由に描けるように配慮した。

【図 3】クレヨンで初めて描く

1 歳 3 か月、台所の魚焼き機を少し引き出して、クレヨンを網の上の手前に並べる遊び【図 4】を始めた。筆者が魚を焼く姿を見ていて真似をしたのか、クレヨンが食べ物に見立てられた瞬間であった。コロコロと並べて満足そうにしていた。その後のままごと遊びでも食材に見立てて使用される様子が度々窺えた。

【図 4】クレヨンを魚焼き機の網に並べる

1 歳 6 か月、鉛筆やボールペンで、床にうつ伏せになりながら気楽に描く姿も見られた。だいぶ描く行為に対して抵抗が無くなった様子である。（元々抵抗があったわけではないが、それまでは描画以上にクレヨンを「もの」として遊びに取り入れることが多かったため、描画材料としてもいろいろな素材の扱いに慣れてきた。）

1 歳 7 か月、積み木のように積み重ねることが得意になり、描画以上に好んで遊ぶようになった。こちらがベースを持って（例えば泡だて器を逆さにして）倒れないように保持していると、それに次々に慎重に重ねて楽しみ【図 5】、12 色全てのクレヨンが重なると達成感で笑顔になる様子が見られた。

【図 5】クレヨンを重ねる

1 歳 9 か月、地域の子育てひろばにて現地のクレヨン（自宅のものより蝋成分が多い一般的なもの）を使用して、腕を上下し点や線【図 6】を描いた。身体の発達に即した自然な動きによる表現

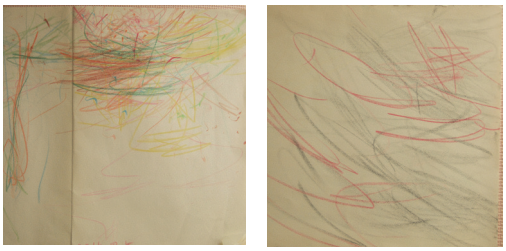
であり、運動的な要素が強い。すなわち、肘から先の手が一本の棒のようになって、上下して点描したり、身体や紙が動いた時に偶然に線描したりするようになった。

【図 6】クレヨンで点や線を描く

2 歳 0 か月、クレヨンをきれいに並べて置いたり、筆者がベースを保持していなくても積み重ねたり【図 7】できるようになった。他の玩具と組み合わせて使うこともあり、なじみの素材の 1 つとなって T の遊びによく取り入れられた。

【図 7】クレヨンを自由自在に並べたり重ねたりする

2 歳 1 ～ 2 か月、クレヨンで描画に集中するようになった。そして勢いのある線が描けるようになり、腕を左右に振り動かすことによる扇状の軌跡【図 8】も見られるようになった。

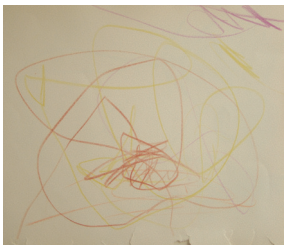


【図 8】クレヨンで勢いよく描く

その頃、まだ細い持ち手は早いと思いながらもクーピーペンシルも与えてみると、まずはクレヨンと同じように重ねられるか確かめ、できないと認めると、クレヨンと組み合わせて床の上のマットの上にさして並べて【図 9】遊んだ。

【図 9】クレヨンとクーピーペンシルを重ねる

2 歳 3 か月、初めて円（閉じた形）【図 10】を描いた。肘・肩・手首が連動した回転運動の軌跡である。そしてその後は、T が大好きな風船をモチーフにして絵【図 11】を描く姿が多くみられるようになった。磁石の内蔵機能により何度でも描いて消せる玩具（2 歳 0 か月から使用。筆者自身も幼児期に同類の玩具で遊んだ記憶がある）を用いて風船【図 12】を描いたりすることが増えた。以前のような身体の発達に伴う運動による描画というよりは、はっきりと何を描くか意志をもって目と手を連動させて円を描いた後で、円から線をのばし風船に仕上げている。手首と指先が柔らかくなった証拠である。また同一画面上に、複数の風船を配置するように描くこともあった。ちなみに風船の絵は 3 歳を過ぎてもお気に入りのモチーフとして描き続けている。



【図 10】クレヨンで初めて円を描く

【図 11】クレヨンで風船を複数描く

【図 12】磁石内蔵の玩具で風船や線を自由に描く

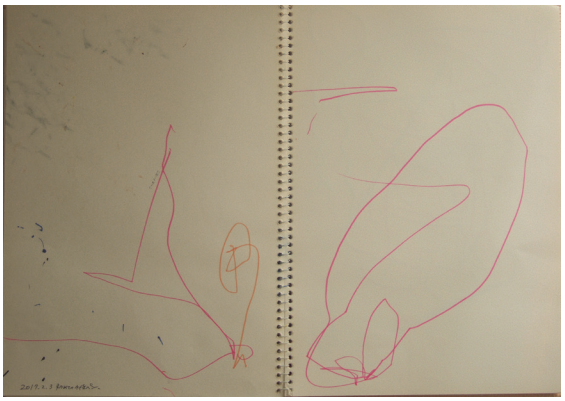
2 歳 4 か月、「足描いてるの」と言いながら初めて手足のような形を描いた。筆者が先に描いた紫色の鬼の顔の上に重ねるように、オレンジ色で顔・手・足を描いた。（残念ながら筆者の絵が重なり画像が見えづらいため掲載は割愛する。）まさに、いわゆる顔から手足が出た頭足人である。ただ、何故かこれ以降なかなか頭足人は見られなかった。

ところで、クーピーペンシルも積極的に描画に使用するようになったが、力の入れ具合が調整できずにボキッと折れてしまうことが多々あった。また細く長い形状のため足で踏むなど、ふとした時に思いがけず折れることがあり、折れた直後は驚いて筆者に報告することもあった。その後は短くなっても小さな手にはむしろ持ちやすくなったのか、嫌がることもなく握って描画に取り組む姿【図 13】が見られた。

【図 13】クーピーペンシルで描く

2 歳 5 か月、クレヨンの形状を利用し、手足の指にはめたり【図 14】、ちょうど節分の季節だったため、鬼の角に見立てて自分の頭の上に掲げてみたりする姿も見られた。同時期、色の好みが出てきて描画の際のクレヨンは黒色・ピンク色を選びたがるようになった。新たに水性ペンも与え、クレヨンとは違うなめらかな書き味に面白みを感じている様子【図 15】であった。

【図 14】クレヨンを手足にはめて遊ぶ



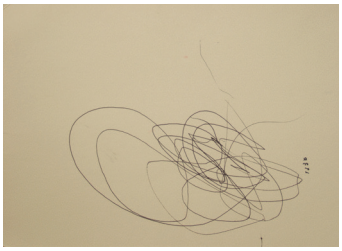
【図 15】水性ペンで初めて描く

２歳６か月、ペンの書き味を体験したのが功を奏したのか、クレヨンでも少しずつ自由な曲線【図16】を描く様子が見られるようになった。

【図 16】クレヨンで曲線を描く

ところで、１歳児の頃は、紙を自ら空いた手で押さえる発想がＴにはないため、描く度にクレヨンと共に紙が動いてしまう。筆者が紙を机に貼るなどの工夫も考えられたが、そばにいる時は筆者が手で押さえて紙を動かないようにした。そうしないと描いた線に偶然性以外の成長の気付きが感じられない（Ｔ自身も筆者も）のではと考えたからである。何を描いたとか、きちんと閉じた形(円)が描けたとかという気づきは、紙が動かなければこその産物である。なお、２歳６か月頃からは自ら紙を左手で押さえる様子が見られた。

２歳６か月、黒いボールペンでその当時好きな食べ物だった「なると」【図 17】を描いた。だいぶ自由に肩・肘・手首が連動して描画できるようになり、ボールペンのすべりも良く、なるとの模様も相まってグルグル描くのが気持ちが良かったのか、その後何度もモチーフになった。



【図 17】「なると」ボールペン

２歳７か月、描いたものにタイトルをつけたり【図 18】、描きながらあるいは描いた後に自作のお話を語り始めたり【図 19】した。お話の内容は、１枚の紙に描いた複数の関連性のない絵同士に、つながりを持たせるがごとく無理矢理文脈を作って１本の話に仕立てあげるようなものだった。筆者は聞き取れたキーワードを絵の中にメモしていったが、やはり元々関連性のない絵同士の結びつきであるため、脈絡のないお話となる。例えば、【図 19・左】は「まぶしい、だって。雲がまぶしいをやっつける。緑のおそら。バナナ。ヒヨコ。バレンタイン。ポイント、ロケットに乗った。」と１つ１つ話ながら次々に描いており、気持ちは理解してあげられるが全体のお話は意味不明である。一方、【図 19・右】は、「おうち。ママのおうち。ママのロケット。Ｔのおうち、新幹線でついた。お砂場で遊んでロケットで帰った。お星さま。」と教えてくれた。こちらは１つ１つの絵が少しつながりを持ち、比較的分かりやすい。内容はＴが日常生活で見聞きして知ったことと関わりのある物事ばかりで、造形活動以外の体験が心に働きかけ造形活動に直接結びついているのを感じられた。なお、この頃から非常に滑りがよく書き味もよい蜜蝋クレヨン（頂き物）も使用している。

【図 18】「バレンタイン」クレヨン

【図 19】自作のお話付きの絵（クレヨン）

同じく２歳７か月、初めて水彩絵の具を与えた。にじみの効果や、色の塗り重ねの効果などの良さを体験してほしいのと、仮に紙以外の何かに付着した場合にアクリル絵の具よりも取れやすいため、水彩絵の具を選んだ。何を描くでもなく（最終的には何を描いたのか本人が後付けで述べることもあるが）紙の上で太めの筆をすべらせる感覚が気持ち良かったように見られた。明らかにクレヨンの描画感覚とは違う面白さがあるようだ。赤・青・黄の３原色から、Ｔにどれか１色を選ばせて、飽きたら順に他の色も出した。絵の具を出した小皿や紙の上で自然にできた混色で、違う色が生まれることにも気づかせる。筆の持ち方や描き方などは特別に指導せず、やりたいようにやらせたが、筆を持つ位置だけは、筆先に近い方が扱いやすいことを伝えた。初めての絵の具に、少し緊張感を持って座って描いていたが、慣れてくると途中で立ち上がり筆を紙に押し付けて力を加えながら筆をすべらせるように【図 20】描いた。一度体験すると、毎日のように「絵の具したい」と言ってくるようになった。水を使うので準備と後片付けが少し手間取るため本人の希望通り頻繁にはできないが、なるべくやりたいタイミングで提供できるようにしてあげたいと考えている。気持ちがある時こそ心が大きく動くチャンスであるから、それを大事にしたい。

【図 20】水彩絵の具で初めて描く

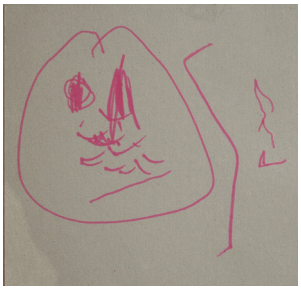
ところで、Ｔは２歳５か月から保育園に通うようになったため、園での造形活動やその他の体験においても様々な刺激を受け、描く対象（モチーフ）に変化が見られるようになった。例えば、2歳８か月には保護者への母の日のプレゼント用に保育士が用意した台紙（顔・髪・服があらかじめ画用紙で貼ってある）にクレヨンで目・鼻・口を描き入れたものを制作した。「今日ママの顔描いたの」と本人も何を描いたのか認識して筆者に報告し、これが初めてモデルを意識した顔を描く体験になったと思われる。保育園に通い始めたことで、筆者は園での造形活動（の結果としての制作物）に触れる機会にも恵まれ、非常に興味深く受け止めており、Ｔ自身も楽しんでいるように見受けられる。制作の過程については筆者が担当の先生からの話を聞き想像するしか知る手段がなく、実際のところどの程度保育者が手を差し伸べたのか（言葉がけを含めて実際の制作にどの程度関与したのか）が不明なため、本稿の画像データには入れない。しかるに、保育園という集団生活において、季節ごとの行事など１つ１つ体験を積み、造形活動も合わせて重ねていく過程で、周りの友人や先生の影響も受けながら覚えたことを、家庭の中で反復したり確認したりしながら造形活動において互恵的な影響を与えている様子も認められる。例えば、初めて顔を描いたのが園での活動を通してであったのは、それ以降の家庭での描画活動に大きな影響を与えた。なお、Ｔはその後２回

ほど転園し、現在３つ目の園に落ち着いているが、（その他の複数の園の見学を通しても）園により造形活動に対する考え方がそれぞれ違うことが窺える。保育園・幼稚園における造形遊びも乳幼児にとって非常に重要であると思われ、機会をあらためて調査・論考したい。

２歳９か月、ピンク色が大好きになる。保育園で見たペープサート（歌やお話の登場人物の人形などを棒の先に取り付けて工作し、保育者が棒を手に持って演じながら歌やお話を進める遊び）を自宅でも「つくりたい！」とせがんだので（「つくってほしい」ではないところに主体性が感じられる）、筆者が園で実物を確認し、同じようなものをＴの希望通り２つ作ることにした。白い厚紙を風船の丸い形に切り、片面に風船の形の色画用紙を貼り付けるところまでは筆者が作り、厚紙のツルツルした面になじみのよい水性ペンで絵を描くのはＴが担当した。園と同じようにピンク色の風船の裏には「ウサギ」の顔、黄色の風船の裏には「バナナ」【図 21】を自分なりに描いた。小さいものだが、そのような命あるもの（顔や、そのものの特徴を捉えたもの）を描いたのは初めてであった。ペンの色の選択も、自らピンク色と黄色を選んでいた。そしてＴは実際にそれをペープサートとして活用して「お話してほしい！」（「お話したい」ではないところに、興味の中心が制作にあることが分かる）とせがんだ。後日、筆者は園の先生に歌を聞き覚えて、自宅で共に遊んだ。

また、その翌日、自宅で初めて特定の人の顔を描いた。Ｔの住むマンションの管理員の方をモデルに「おそうじのおじさん」【図 22】と命名して掃除用具も添えたものである。自発的に誰かの絵を描くという明確な意志の元で描かれたことがそれまで無かったので、記念すべき１枚になったが、前述の保育園での影響も大きかった可能性がある。２歳 11 か月の頃、見る力・考える力・想像する力が育ってきたことが伺える事例があった。近所の博物館にある水槽の新しい魚が環境の変化によるストレスで本来の黄色・青色の縞々模様から、単色の真っ黒になってしまったことを聞いて見て知ると、「イライラしてるのかな」と述べた。相手の気持ちを想ったりする力も合わせて、絵の顔の表情を描く際にも関わりがあると思われた。その後、３歳０か月に保育園にてママの顔（黄色で）、パパの顔（茶色で）、自分の顔（ピンク色で）を描いたのである（その３色はいずれも暖色で、家族の一体感が感じられた）が、ずいぶん簡略化されたようなぐるぐるの円による表現で、モデルの特徴までは表現されず、「おそうじのおじさん」のモデルがＴにとって家族以上に特別な印象を与えたことが分かる。「おそうじのおじさん」は、Ｔが最も好きなピンク色で描かれていることからも、モデルに好印象を抱いていることが推測される。目（白目の中に黒目がある）、鼻、口、ヒゲらしきものも描かれ、右の方には掃除機とホウキも添えられており、観察の眼が感じられる。

【図 21】水性ペンでウサギとバナナを描く



【図 22】「おそうじのおじさん」水性ペン

少し戻り 2 歳 9 か月､白い厚紙（顔）と白いコーヒーフィルター（身体）を使い水性ペンで「てるてるぼうず」【図 23】の顔や模様を描く活動を用意した。まず水性ペンでじっくりと自由に点や線を描いてから、水で濡らした筆でコーヒーフィルターの表面をなで、ペンのインクが紙ににじみ広がり混色などが起こる効果を楽しむものである。あらかじめフィルターを濡らしておく方法もあるが、今回は T がペンでの描画をしやすくするために後から水を使用した。普段はこちらから制作を勧めることはしないが、2 歳 9 か月の発達段階での反応を見たいという気持ちと、いろいろなことに触れてほしいため季節に合うものを一緒に制作してみた。長く延ばした線でニッコリした口を表しているのが晴れやかである。

【図 23】「てるてるぼうず」水性ペン

2 歳 10 か月、初めて「塗り絵」（頂き物）に取り組んだ。床に置いて、全身の運動による力をクレヨンの先に込めて力いっぱいに描いている。ピンク色で好きなキャラクターをゴシゴシ描いている様子【図 24】は凄まじかった。T のその時の心情が直接的に表れているようである。自分の手の動きが自動的につくる画面を楽しんでいるようにも見える。「塗り絵」とは言うが、「塗る」感覚はなく、あくまでも「描く」感覚で、少しずつ塗り絵への T の取り組み方が変化していく様子が見られた。筆者は始め、正直なところ、塗り絵という商品はあらかじめ他人が描き印刷された黒い輪郭線に、色のみ付け加えていくあまり主体性のない遊びのように感じていた。（と言っても筆者自身、小学生期に塗り絵を楽しんでいた記憶があるが、造形活動を提供する立場になった時に、積極的に選択しようと思えない商品だった。）しかし、T の真剣に全身で取り組む姿を見て、塗り絵の可能性に気付かされた。輪郭線はあって無いようなものであり、そのキャラクターの存在（オーラ）に色をつけていく（命を吹き込む）かのような行為に見えた。

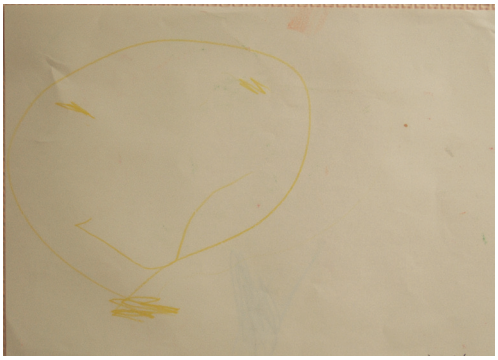
【図 24】塗り絵を初めて描く

同じく 2 歳 10 か月、水彩絵の具でも大好きなピンク色を希望するようになり、白色をベースに赤色を少し混ぜて自分で色を作らせた。筆の扱いも慣れてきて、筆で遊ぶというよりは、描きたいものを意図して描くようになった。その時描いた顔【図 25】はとてもはっきりした表情で、左右には両手のようなものも確認できる。（顔部分のみ、一時期飾っていたため、画像には切り取り跡が見える。）その直後に別の紙に線で何か描いたので、何か聞くと「猫のしっぽ」【図 26】ということであった。筆で描くと、勢いがある線の方向性や余白とのバランスも意図せず表現要素となり、クレヨン以上に画面に空間性・奥行き感が生まれて面白みがあると筆者には感じられる。綿棒を、筆の代わりに使うよう勧めてみると、無数の点々を描き始めた。その後、絵の具のわずかに色が残った小瓶を逆さまにして紙に丸い瓶口の跡をつけてみるなど、自分なりに素材・用具との関わりを試してみていた。

【図 25】水彩絵の具で顔を描く

【図 26】「猫のしっぽ」水彩絵の具

3 歳 0 か月、親戚宅にある黄色のクレヨンで、コピー用紙に顔つきの「風船ちゃん」【図 27】を描いた。続いて 5 枚の風船の色を変えて（黄色・オレンジ色・緑色・黒色・赤色）描き【図 28】、時に風船の周りに点描もして、最後の赤い風船には再び顔を描き入れた。店頭で浮いている風船と、自宅で浮かばず床に落ちる風船と、2 種類あることを T は知っている。当時両方お気に入りだったが、どちらかといえば浮いている方により心惹かれるのは容易に理解できる。この 5 枚の風船は、いずれも紐が左側に伸びており、右側に円がある構成になっているが、紐よりも円が上方に位置していることから、浮いている状態の風船を描いていることが分かる。T の願いが込められているように感じられた。



【図 27】「風船ちゃん」クレヨン

【図 28】風船の絵（クレヨン）

その数日後、ピンク色の水性ペンで何の絵を描いたのかと聞くと自分の氏名【図 29】を書いたと述べた。まるで絵を描くかのように、字を書いたつもりのものである。それまでも、筆者が仕事の書類や保育園の連絡帳などを記入していると、「T ちゃんも」と言ってボールペンで描きたがることがしばしばあったが、スケッチブックに色つきの水性ペンで文字を書いたと教えてくれたのが初めてのことであった。文字も絵も、同じように表現されているのが興味深い。

【図 29】自分の氏名を書く（水性ペン）

同じく３歳０か月、絵の具を手足につけて紙に跡をつける遊びを楽しんだりするも、描画活動は「塗り絵」をよく好んで開くようになった。表紙でキャラクターの正しい色を確認しながら塗る姿が何度も見られるようになったが、その行為の発端は父親の真似でするようになったことが数か月後に父親の証言から判明し驚いた。塗り方の過程など指導しているつもりはなくても、大人の何気ない動きを見逃さないことが伺えた。気に入らない画面になると（予定していた色と違う色で間違って塗ってしまったり、塗りたい色が急に変わったりして）、怒って塗り重ねて本来の希望の色で上書きしようとしたり、消しゴムで消そうとしたりするが、鉛筆と違いきれいに消すことはできないため、納得できずに憤慨する姿も見られた。３歳１か月、筆者の色鉛筆（１本の色鉛筆に複数色の芯が入っているもの）を貸すと、それで「花びら」【図 30】と命名した絵を何枚も描いた。紙の下のほうから上に向かっていくような線の集合体は、日頃Ｔの背の高さ（約 90㎝）から見える植物の風景なのかもしれない。無数に伸び上がる線が、生命力を感じさせる。「花びら」はその後も引き続き時折モチーフになっている。

【図 30】「花びら」（色鉛筆）

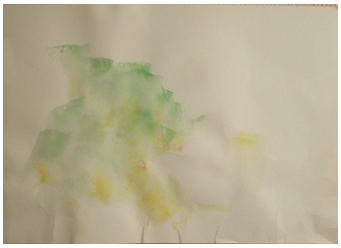
３歳３か月、床に敷いている柔らかいマットの上に紙を置き、色鉛筆で何か描こうとした時に、途中でふいにブスッと紙に穴が開いてしまったことがあった。Ｔは驚いてそばにいた筆者に報告し、筆者も事実を認めると、その１つ目の穴をきっかけにして、Ｔは故意に次々と色鉛筆をさして【図 31】穴を開けていった。自分の行為が直接的に何かの形態を変化させることや、単純に穴を開けて空洞を作ることが、面白く快感であったと思われる。

【図 31】紙に色鉛筆をさして遊ぶ

同じく３歳３か月、「絵の具したい」というＴに、筆の代わりに 3㎝立方程度の四角い白いスポンジ（台所の掃除用）を与えた。それでスタンプするように描く場を用意すると、自分なりに表現を始めた。何を描いたのか、話してくれた内容を聞くと、その時々の生活や季節に合う身近なものがテーマであった。いくつか紹介（タイトルは基本的に後付け）すると、まず書道の半紙に描いたものは、吸水性が良い紙のためスポンジの水分がみるみる吸収され、面的な絵となった。後で「きれ

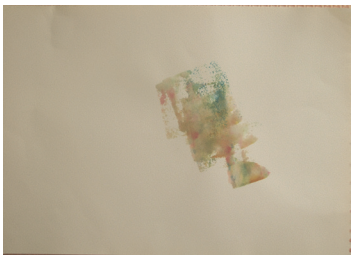
いな星」【図 32】と命名されたが、その前にＴは「ランプ」だとも説明しており、描いた絵から光るものをイメージしたようだった。この後、筆者が画用紙の方がスポンジと相性が良いと判断し、紙を画用紙に変えて緑色系で水分多めに描いたものは、最初に「時計」と言っていたが最終的に「広場」【図 33】と命名された。親戚宅の印象的な古時計をイメージしながらも、緑色がにじんで広がる様子を見て広場を連想させたようだった。次に水分を少し少なめにした赤色で画面に描いたものは、これもタイトルが変化し「イチゴとリボン」→「コーヒー」→「コーヒーと魔法のランプ」【図 34】に落ち着いた。筆者には最初のタイトルの方が色と形に合っているようにも思えるが、本人が言う通りにメモした。また、エッジの効いたスポンジの形を生かして、水分を少なめにしてハンコのように押して描いた「ドレスと靴、歩いてる」【図 35】は、まさに偶然できた模様からイメージしたタイトルだろうと考えられる。前述のように、描いた後に次々とイメージが展開し、同じ絵についてのタイトルが変わっていくのが興味深い。

【図 32】「きれいな星」水彩絵の具



【図 33】「広場」水彩絵の具

【図 34】「コーヒーと魔法のランプ」水彩絵の具



【図 35】「ドレスと靴、歩いてる」水彩絵の具

３歳３か月までは、ピンク色の服しか着たがらなかったが、３歳４か月頃から「ピンクより黄色が好き」と言い始めた。好みの変化の理由は不明であるが、アニメの１番好きだったキャラクター（イメージカラーがピンク色）もなぜか（イメージカラーが紫色のキャラクターに）変化した。元々、アニメの登場人物にイメージカラー（その人物の衣装の色）を組み合わせて認識していることが窺えたが、好みの変化はその後の塗り絵の色の選択にも影響し、様々な色が使われるようになり【図 36】、クレヨンだけでなく水性ペンも塗り絵に用いられるようになった。そのキャラクターのイメージカラーを忠実に選び表現しようとしている。３歳４か月、朝起きてすぐに黙々と静かに塗り絵を始める姿が見られた。机の上に置いておいた塗り絵を椅子に座らずに膝立ちの姿勢で開き【図 37】、逆さまでも気にせず描く。その数日後には、夜に眠る直前に、机や床を使用せずに椅子に座り塗り絵を左手で持ち両膝で支え【図 38】、右手で描いていた。床に置いて力いっぱい描いていた頃に比べると、力の加減をしながら細部を塗っ

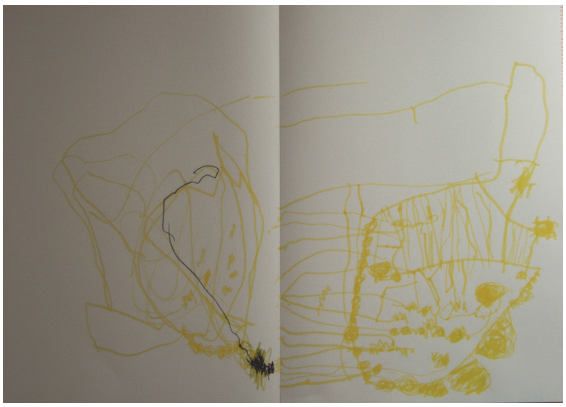
ていることが分かる。ピンク色のペンの後、水色のペンで上から重ね塗りし、「あー！紫になったー！」と混色の発見を教えてくれた。いろいろ試す中で、発見や驚きの体験を重ねていってほしい。

【図 36】塗り絵表現に現れた変化（クレヨン）

【図 37】膝立ちで塗り絵に取り組む（水性ペン）

【図 38】椅子に座り塗り絵に取り組む（水性ペン）

3 歳 5 か月、絵の内容が急激に複雑化し始めた。「幽霊船」【図 39】について T は、「幽霊船なの。階段があって穴がたくさんあいてるの。穴から落ちちゃうの。羽が生えて飛んでいくの。」と説明しながらどんどん線を描き足していく。かつて描いていた単体の小さな絵をつなげるお話ではなく、1 枚の大きな絵について内容のあるお話を創作する言語表現も育ってきた。お気に入りの黄色を選び、呼吸するように自然に迷いなく水性ペンを走らせる。幽霊船はテレビでみたアニメの記憶だと思われるが、見たものとは明らかに違う自分なりの構造を描いている。同じ日に、他の紙に○×の記号や、バス停を○と線の記号的表現で複数描いたり、複数の大小の○でシャボン玉の風景を表現したりする姿も見られた。この日を境に、T の描画への取り組み方に明らかに質的な成長が見られ、筆者は急な変化に驚いている。



【図 39】「幽霊船」水性ペン

6. おわりに

考察の結果、発達段階に応じて自発的な遊びの内容・方法に変化が認められた。秋田は、「自分の工夫でかかわっていきやすい特性を持っているモノは、遊びの継続的な発展を支える」[4] と述べている。確かに同じ「もの」でも、T の発達に合わせて遊び方がいろいろ変化可能であることが観察から窺えた。

各家庭の保育者の中には、元々造形活動に興味が無い者や、嫌いでなくても苦手意識が否めない者も多いだろう。また家事も育児も仕事も片手間にできることではなく、保護者の心身の状態から制作の場を用意することは容易ではないのも現実的な家庭の状況であろう。本稿において、過去 3 年間の記録を振り返り、「幼児の造形表現を支援

する上で大切なことは何か」を考えて思うことは、特別に保育者として子どもの感性・創造性を育てよう、何かを教えようと思う必要はないということである。それよりも、単純に１人の見守り役として子どもの自由な表現を同じ目線に立ってしっかりと受けとめて共感する姿勢を子どもは望んでおり、そのような大人がそばにいることが子どもにとって心の安定と成長のために大切であると考えている。それが結果的に子どもの感性や創造性を豊かにし、表現する力を支えることにもつながるのではないだろうか。そういう意味で、造形や美術を専門とする人間は、幼児の表現を素直に受け入れられる心の土壌が耕されているように感じられる。よって、保育園や幼稚園で造形講師が定期的にワークショップをすることや、レッジョ・エミリア市のアトリエリスタのように芸術家が幼児教育に携わるというのは、意義深いといえよう。また地域の子育てひろばにある手作りの遊具は、家庭では難しい大型サイズのものもあり、乳幼児の遊びの世界が広がるきっかけにつながる。一方で、毎日を過ごす家庭の生活空間は、子どもが誰よりも信頼している保育者の元で、最も安心した心境で自己を開放し表現活動できるかけがえのない場所であるともいえる。Ｔの満足気な表情を垣間見るたびに、この時間と空間を共有し、共感していくことの意義を感じさせられた。

今回はあえて一幼児にクローズアップして家庭という小さな単位の中での観察に基づき描画材料との触れ合いに着目して論考したが、工作や粘土など立体制作に関しても興味深い遊びの展開が見られているため、機会をあらためて論考したい。今後の課題としては、幼児Ｔについてはその後の発達における効果を経過観察し、更に複数の幼児の事例研究を行うなど、家庭における「造形遊び」の教育的意義をより深く理解するために、探求的実践を継続する必要がある。

参考・引用文献

1）平成 29 年告示『幼稚園教育要領』文部科学省、『保育所保育指針』厚生労働省、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』内閣府・文部科学省・厚生労働省　2017
2）槇英子『保育をひらく造形表現』萌文書林 2008　p.9
3）同上　p.11
4）秋田喜代美『保育の心もち』ひかりのくに 2009

図版出典

【図１～39】筆者撮影

“Formative Play” at Home: Using Mainly Drawing Materials

Kei MIKAMI

【abstract】

Compared with research on “Formative Play (FP)” in kindergarten and nursery school education, research on FP carried out at home seem to be underdeveloped. This is a case study on FP at home using mainly drawing materials. The author has observed Child T (three years and five months old now) in her daily FP since she was born, and have analyzed her various works qualitatively. As a result, depending on her developmental stages, some changes were recognized in relation to what and how to play voluntarily. In order to more deeply understand the educational meaning of FP at home, we need to continue exploratory practice.

【key words】

Formative play, Home, Drawing materials, Developmental stages